予告 Future Event

[第36回] 名古屋芸術大学卒業制作展
[第13回] 大学院修了制作展

[第36回]
名古屋芸術大学卒業制作展

愛知県美術館ギャラリー［愛知芸術文化センター8F］
2009年2月24日［火］−3月1日［日］ 10:00➔18:00（金曜日は20:00まで）
［美術学部］ 絵画科日本画／洋画コース・美術文化学科
［デザイン学部］ デザイン学科
［大学院］ デザイン研究科

名古屋市民ギャラリー矢田
2009年2月24日［火］−3月1日［日］ 9:30➔19:00（日曜日は17:00まで）
［美術学部］ 造形科・版画選択コース
［デザイン学部］ デザイン学科
［大学院］ デザイン研究科

名古屋芸術大学 西キャンパス
2009年2月24日［火］−3月1日［日］ 10:00➔18:00（日曜日は17:00まで）
［美術学部］ 絵画科洋画コース・［デザイン学部］ デザイン学科

[第13回]
名古屋芸術大学大学院修了制作展

名古屋市民ギャラリー矢田
2009年3月3日［火］−3月8日［日］ 9:30➔19:00（日曜日は17:00まで）
美術研究科／デザイン研究科

開催中

AFTER REMISEN #10 荻野佐和子＋小澤輝余子展

2009年1月27日［火］−2月3日［火］
12:00➔18:00
日曜休館　入場無料
会　　場：アート＆デザインセンター
主　　催：名古屋芸術大学美術学部版画研究室
後　　援：名古屋芸術大学後援会、P.S. COMPANY

アート&デザインセンター 1 EXHIBITION → SCHEDULE 3 展覧会スケジュール

Open 12:00−18:00
（最終日は17:00まで）
日曜祝日休館・3/2月−4/2木 春期休館

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

1/ 6火→ 1/10土　日本画3年作品展
1/14水→ 1/20火　『聖母の御眠り』摸写展
1/27火→ 2/ 3火　AFTER REMISEN#10　荻野佐和子＋小澤輝余子展

第36回名古屋芸術大学卒業制作展

2/24火→ 3/ 1日　美術学部絵画科日本画／洋画コース・美術文化学科・デザイン学部デザイン学科・大学院 デザイン研究科
10:00−18:00（金曜日は20:00まで）　愛知県美術館ギャラリー

2/24火→ 3/ 1日　美術学部造形科・版画選択コース・デザイン学部デザイン学科・大学院 デザイン研究科
9:30−19:00（日曜日は17:00まで）　名古屋市民ギャラリー矢田

2/24火→ 3/ 1日　美術学部絵画科洋画コース・デザイン学部
10:00−18:00（日曜日は17:00まで）　名古屋芸術大学西キャンパス

第13回名古屋芸術大学大学院美術研究科／デザイン研究科修了制作展

3/ 3火→ 3/ 8日　名古屋市民ギャラリー矢田
9:30−19:00（日曜日は17:00まで）

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481−8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568−24−0325　tel/fax.0568−24−2897

編集後記

2008年、名古屋市は国連教育科学文化機関（ユネスコ）のクリエイティブ・シティズ・ネットワークにデザイン都市として認定されました。
1989年、世界デザイン博覧会の年に「デザイン都市」を宣言してから20年、様々なデザインに関わる国際会議を継続的に開催してきたことのみならず、街づくりにデザインを生かしてきた結果と言えるかもしれません。
アートやデザインは、人々の生活に新たな視点や時代を感じとるきっかけを与えてくれます。その『気づき』は、私たちの暮らしを少し豊かにそして幸福にしてくれるちからを持っていると信じます。

B!e Vol.23
発行日　2009年1月31日
編　集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326（代表）
Tel/Fax. 0568-24-2897（直通）
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印　刷　サンメッセ株式会社
2009 Printed in Japan
© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2009 Vol. 23
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 Design for the city

デザインのある街づくり

デザインDO ワークショップから見えて来るもの?

第6回国際デザインコンペ　NAGOYA DESIGN DO! 2008の入賞者と中部地域のデザインを学ぶ学生とのデザインワークショップが、12月1日から一週間、国際デザインセンターで開催された。

テーマは「名古屋みやげ」。若いデザイナーや学生からどんなアイデアが展開されるのか、海外からの参加者たちと上手くコミュニケーションをとり最終プレゼンテーションまでたどりつけるのか?本学からは在校生3名と今回のNAGOYA DESIGN DO! 2008で1500名の中から、みごとグランプリを獲得したデザイン学部IDコース助手の濱田清絵が参加。未知なる不安と期待を秘めながらワークショップはスタートした。

ワークショップは、「衣」「食」「住」「もの」「ストーリー」の5チームに分かれ、各チーム8名、デザインディレクターの指導のもと調査を開始した。「名古屋みやげ」というテーマに、それぞれ名古屋に昔から伝わっている「陶、竹、和ろうそく、絞り」など職人技の体験、伝統を守って作り続けている八丁味噌蔵訪問、仏壇店や堀川散策などの視察を行った。海外からの参加者は、日本人あるいは名古屋人にとっては当たり前だと思っている所に意外な程感動と興奮をしている。リトアニア、台湾、南アフリカ、エジプトなど海外からの参加者たちの、五感を十分発揮した鋭い着眼点や意外な質問に驚き、「ハッと何か忘れていた事に気づかされ」、アイデアの素が徐々に浮かび上がって来た。

街を歩きながら、昨日までは見知らぬ人であったメンバーと協力してプロジェクトを遂行してゆくには、自分自身の持っている力と他の人との比較の葛藤に耐えながら、チームワークすなわち協働の気持ちが重要だと痛感した。皆で協力して一つのテーマに向かって力を結集するのは並大抵では出来ない事を実感しながら、限られた日数の中、連日夜遅くまで話し合いは続いていた。

私は「食」チームを担当、円頓寺商店街では、まだまだ昔からの味を守り続けている和菓子店やエビフライの専門店などの内側を見学、岡崎の味噌蔵で試食した味噌こんにゃくは、南アフリカ人には食べ物には見えなかった様子や、名古屋駅構内のキオスクをリサーチした時には、もうこれ以上めずらしい味はないのでは、と思える程の名古屋味のオンパレードに驚いた。ところが売り上げ一位はなぜか、『赤福（三重県）』と『もみじ饅頭（広島県）』と聞き、がっかりする。

食のチームはリサーチの段階から、新しい味の提案ではなく、名古屋を訪れた外国人のために、中部国際空港のショップで販売することを目的とした、名古屋味の匂いファイル、記憶できる音ファイル、地図やメモ、キップ、箸袋やもらった物ファイルなど、自分の旅の記憶を帰国後いつでも楽しむ事が出来る「記憶や思い出のファイリング」を「名古屋みやげ」として、最終日に提案した。他のチームも、今までにない新しいアイデアを提案した。
（各チームのプランの詳細はデザインワークショップレポート冊子として、国際デザインセンターより発行される）

今回ワークショップを参加者と共に経験し、人間は短時間でも集中して深く関わっていくことによって、無限の力を発揮できる事に感動するとともに、デザインは単に発想だけでなく効率と豊かさを兼ね備えた現実的なプランとして、これからの社会に提案できることを確認した。多様な観点から表れたプランは、『デザインのちから』を存分に発揮し、たった一週間という期間だったにもかかわらず、今後、グローバルな視点、社会との関わりを深く意識した新しい”名古屋みやげ”として具体的な展開を示唆する濃い内容となった。

デザイン学部教授　和田義行

特集 Design for the city

デザインのある街づくり

町を巡るフィールド・トリップ、常滑の人々と

常滑は焼き物の町として知られている、しかし、かつてのような賑わいがあるわけでなく、使われなくなった古い工場、煙突が産業遺産のように残る、少し寂れた町である。多くの観光地がどこに行っても同じような土産もの屋を中心とした観光施設を持っているのに対し、それらがないレトロな空間と路地が、逆に魅力である。かつて製陶工場が住まいと共に密集していた一帯は丘の上にあり、車が通ることのできない細い坂道や階段が続き、曲がりくねっているために迷子になるが、それがいいと観光客が言う。

「常滑フィールド・トリップ2008」は、本学非常勤講師の坂倉守氏と愛知県立芸術大学の大学院生丹羽康博が中心となって企画された。20人程の参加アーティスト、デザイナー（名古屋芸大卒業生、大学院生、研究生、愛知県芸大学院生、名古屋造形大卒業生、地元作家、その他）が、町のさまざまな場所、建物、元工場、民家、小屋、廃屋、空き地などを見つけ、地元の人々の協力を得て、そこに作品を作り発表した。なかには3ヶ月近くも滞在し、作品にした人もいた。とこなめ中央商店街（会長 伊藤氏 展覧会実行委員会会長）は「ガラガラ市」という妙な名前で、商店街にもう一度足を運んでもらおうとしているが、今年は昼間から若い人が通りを歩いていてうれしいと。また商店街にあった旧市役所の建物を制作アトリエ、打ち合わせ場所、宿泊所として使わせてもらった。その他さまざまな地元の人々の協力のおかげで、1週約3.5キロにも広がるエリアを巡り歩きながら作品を見る企画は、まさに町のさまざまな風景や人々の生活の場を見、町の人々と話をする展覧会となった。いつもは人通りの少ない寂れた商店街を、人々が歩き、そこから路地をたどって会場を探しに行った。ちょっと前まで、おばあさんが、そこに暮らしていた雰囲気が残るふとん屋を会場にした本学デザイン学部卒業生の横井彰は、毎日人々と話をしながら人々の絵を描き、家の中に展示した。会期中も会場にいて、町の人の絵を描き続けた。私は、空港と伊勢湾が見渡せる場所にありながら、あまり使われていなかった休憩所を使い、「顔出し」のある東屋を作った。そこに古い焼き物の煙突を使って望遠鏡を作り、空と海が反転して見えるように設置した。地図を片手のフィールド・トリップは、こちらが予想したよりはるかに好評で、地元の人から次も期待されている。

今回、常滑市・愛知県立芸術大学・名古屋芸術大学はじめ多くの後援、協賛を頂いたことにも感謝したい。　　デザイン学部教授　平田哲生

レビュー REVIEW レポート

aim'08 土から生える
国際陶磁器フェスティバル美濃2008
2008年9月14日－28日
多治見・土岐・瑞浪の４会場／岐阜

8回目を迎えた「国際陶磁器フェスティバル美濃」の専門委員として、普及事業を企画運営することになった私は、緊張と不安が連続する暑い夏を過ごした。

アートプロジェクト「土から生える」は、陶磁器の歴史と人との根源的な関わりをテーマに据え、土を掘り、粘土にして成型、焼成するという、やきものの過程に関わり深い場を設定して作家たちに制作を挑んでもらった。伊藤慶二と鯉江良二という本展審査委員でもあるベテラン陶芸家と、気鋭の人気陶芸作家である内田鋼一。さらにしつらえの達人であり目利きとして、古道具店主である坂田和實に参加を請うた。中部地域に縁の深いアーティストでもある遠藤利克と藤本由紀夫を招き、設楽知昭と石井晴雄、森北伸に参加を得た。

土を単なる素材としてではなく、生の根源としてとらえること。土地が記憶している陶磁器産業の盛衰の痕跡を顕在化する制作が実現した。とはいえ、自画自賛しているわけではない。運営の任は重く、予算と人出不足にあえいだこと。地元の陶芸関係者には充分には趣旨が伝わりきらなかったこと。内容に関しては賛否両論であった。しかし、アートによって創作の根源という一石を投じ得たと自負している。

写真：山田亘

遠藤利克《Treib －石庭》
（大川採土場／瑞浪市）

9月27日の日没に、人里離れた瑞浪の採土場に600名もの人々が田中泯の「場踊り：土色の陰影」に見入った。真っ暗ななかで気配を感じる一期一会の場で、作家と対峙できた達成感に報われた。気がつけば、もうすっかり夏は終わっていた。

美術学部准教授
高橋綾子

THE ECHO － JAPAN NEXT
2008年9月13日－10月5日
ZAIM 別館／横浜

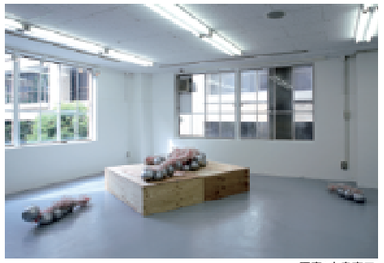
THE ECHOは、作家が発起人となり、私を含め21人の作家による展覧会です。この企画は私が長年温めていたもので、やっと実現した展覧会でもあります。

本企画は現状の展覧会システムとは違った形の選択肢として増やせたらと考えたものであり、作家同士が同じ展覧会に今出したいという欲求に忠実なものです。そしてそこから見えてくる新たな世代の日本人作家の現状を提示できないかと考えたものです。

実際開催するとなると、それなりに大きな規模の展覧会ですから、いろいろな問題がありました。大きかったのはお金の問題です。元々資金なんてありませんから様々な企業にお願いして、協賛をいただき、それでも全然足りなかったので、参加作家全員に一点ずつ作品を提供してもらい、それをもとに資金を作りました（これはぎりぎりまで苦労しました）。

それでもこの展覧会開催の意義はあったと思います。まず、これだけ今活躍中の作家を見せる展覧会をできたというのは素晴らしいことだったと考えています。一方で私たちはテーマを模索するため幾度も話し合いを重ねました。結果、私たちの出した結論は、この皆で話し合っている状態こそが重要なのではないかということでした。そして、これを展覧会中も続け、毎週トークショーを行うことになりました。当然ながらトークショーでは多様な意見が出されました。批判的な意見、時にすごく腹の立つ意見もありました。しかしそれ以上にこういうことに対しての期待感を皆が持っているんだということも実感しました。

何かことを起こし、何かを変え、期待させることがこの展覧会の役割であり、それは今後も続けるべきことであると考えています。



写真：木奥惠三

THE ECHO 参加作家（50音順）：
青山悟・秋吉風人・天野亨彦・
泉孝昭・泉太郎・磯邉一郎・
榎本耕一・大野智史・
大庭大介・川上幸之助・
鬼頭健吾・榊原澄人・
さわひらき・竹村京・
田幡浩一・名和晃平・
星野武彦・政田武史・
増田佳江・山口智子・渡辺豪

前美術学部非常勤講師
鬼頭健吾

RELAY ESSAY
小・中学校の美術教育について考える …… 橋本泰幸

小中学校の頃の学校生活を思い出して、「図工・美術の授業は楽しかった」という人は多い。しかし、その学習が今の生活のどこに生きているかを実感している人は、けっして多くはないだろう。はたして何人の人が「これが図工・美術の力だ」と実感しているだろうか。昨今、学力の問題が話題になって久しいが、それでは他教科が言う学力に相当するものは、図工・美術では何にあたるのだろうか。

一般に、学力は学校教育による学問や芸術の伝達を通して発達させられた、現実的能力とされている。それは先天的な能力と関係するものの、学芸を共有する時代や社会に生きる人々のものと等質性を持ちつつ、その上での個人的能力と考えられている。

図工・美術の教育は表現学習、鑑賞学習を内容としている。

表現学習では絵を描き、ものを作り、鑑賞学習では友達の作品や美術作品を見る。描く、見る活動は、表現力や感受性という能力によるものである。この能力の育成について、学校教育では表現を「自分の思いを表す」、鑑賞を「自分の目で見る」というように、この能力を「個人」の人間形成に働きかけるものとしてとらえて重視してきた。しかし、現実的な側面についてはそれほど顧みてこなかったのではないか。学習指導要領にある図工・美術科の目標には、この二つの領域の学習を通して「美術の感性を豊かにし、基礎的能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」とある。ここにある美術活動による人間形成の目的観が、ややもすると美術活動を手段とし、その固有の価値について問わない姿勢を生んだのかもしれない。

学習活動としての表現は、自らの思考を表すだけでなく伝えることも意図して行われる。鑑賞は見ることを超えて、作品にあるメッセージ、作者の目を通して表された文化や時代、そして社会をも読む活動である。これらの活動によって培われる力こそが、本教科の学力を形成するものではないだろうか。

今までの表現や鑑賞の教育には、これらの活動が持つ「外」に現れる現実的能力、「伝える力」・「読む力」の指導が欠けていたのではないか。表すこと見ることを個人の感覚活動の範囲に押しとどめ、伝える・読むという視覚的コミュニケーションとしての指導を忘れたために、図工・美術教育における表現力・鑑賞力が、学力としてリアリティーを持ち得なかったのではなかったか。

教育は個人の資質向上とともにその個人が文化創造の担い手となることを課題としている。今までのように感覚の経験にとどまる図工・美術教育ではなく、時代や社会、そして文化を背景にして生まれる「視覚＝見方・考え方」の教育としてとらえ、そこでの能力が来る視覚文化、造形文化の創造につながるべく指導が展開するときに、この教育の成果が、生活の中で「これが図工・美術の力だ」と実感されるだろう。まさにその時、図工・美術の学習の成果が「確かな学力」として個人の中に定着したと言えるのである。

美術学部教養部会 教授